

第十三部会

江戸中期の戯作者・大江文坡の仙教

——道教との関連で——

坂出 祥伸

大江文坡（享保十年頃・一七二五—寛政二年・一七九〇）は、ほとんど知られていない戯作者であるが、その後半生、その著作を通して中国の宗教・道教にのめりこんで「仙教」を創唱したという非常に特異な人物である。その伝記はほとんど不明であるが、四十歳頃から浄土教の説教本の種本書きとして著述活動を始め、その生涯に六十余种の作品を残している。安永二年、清人の石天基の著す靈符の利生を説いた『隨身佩』にもとづいて、これを和解した『天真坤元靈符伝』を著して以後、靈符、呪言、易占、擲錢卦、善書、北辰真武神君信仰などの道教的方術の靈驗利生を説いた著述を次々に出版した。ところが、天明元年に著した『修仙靈要錄』で、「清浄無為真一の靈旨にかなう」ことをもとめる「仙教」を唱えて、神仏仙三教は一致していると主張した。さらに翌年の『和漢年中修事秘要』では「天の命これを性という」（『中庸』）の「性」も「清浄無為真一」にほかならないとして神仏儒三教一致を主張する。ただし、「我神国神代の君臣は、即靈旨を以て是を総て神といふ、神は仙なり、仙は神なり、豈神仙の差別あらんや」（『修仙靈要

錄」）「夫れ我朝の諸神は皆仙なり、其故は我朝の上古の人は皆心正直質素にして、虚静恬淡無為なれば、自然と真一の靈旨に契ふ」（『神仙靈章春秋社日醮儀』）と述べているように、我が古代の神々の道と「仙教」は同じものだといふのであり、従って神（仙）仏儒三教一致となるのである。では、「真一の靈旨」を悟るための方法は何か。煉養服食とか方術ではなくて、「工夫」「大悟」であり、別の言葉でいうと、仏教では「坐禅」「大悟」、仙教（道教）では「胎息」「守一」だという。天明四年に著した談義本『成仙玉一口玄談』には、「真一の靈旨」に至る修行法が具体的に示される。それを語るのは「守一仙人」を名乗る一老人である。その内容を見ると、近世道教の内丹の修煉法の一つ、性命双修であり、特に「性」（心）の修行を重視し、しかも、それを日常平素に修行すべきだと説いている。「戯場の役者が舞台にて歌舞伎芝居をするときの意持（こころもち）が、そのまま仙法仙法を修行する人の心得になるのである」（『成仙玉一口玄談』巻四）。かくして修行によって到達した「清浄無為真一」の境地は、「日輪」によって象徴されているが、それは人々が本来自分に内在しているともいう。あるいは「一切の禽獸魚虫の類も具有している」（同前巻五）ともいう。人はこれを修鍊によって発見し到達せよと「仙教」の主旨を宣伝している。以上が大江文坡の創唱するところである。